「まことの故郷へ帰る旅路」

「わたしたちは、何一つ持たないでこの世に来た。また、何一つ持たないでこの世を去っていく。主が与え、主が取られる。主のみ名はほむべきかな。」
葬送式の冒頭に読まれる聖語です。先日、盛岡聖公会の信徒が逝去され、葬送告別式、火葬を終えて聖堂で帰宅後の祈りを行いました。ご遺骨は埋骨式まで聖堂に安置されることになりました。ご家族と一緒に聖卓の中に安置した後に「一番安心出来る場所、スイートルームだね」とご家族の皆さんが仰っていました。盛岡聖公会は聖卓、八戸聖ルカ教会は奥の祭壇の中にそれぞれご遺骨を安置出来るようになっています。ご存じの方もいらっしゃると思いますが、知らない方もいらっしゃると思います。教会でご遺骨を埋骨式までの期間お預かり出来ますので是非覚えておいてください。

聖公会の聖堂（礼拝堂）の最も大切なもの、中心は聖卓（祭壇）です。

私はかつてある先輩聖職に「常に祭壇を整えなさい。それが乱れるのはあなたの心の乱れにつながります。」と言われたことがあります。その言葉の意味はイエス様を常に真ん中にして生きていきなさいというメッセージだと思っています。

私たちは聖卓の前で一礼をします。それは十字架にではなく、聖卓に対して礼をします。聖卓はフェアリネンクロスという特別な白布で覆われています。このクロスは、十字架上で死なれたイエスの遺体を包んだ布に由来します。このクロスの上で聖餐式の際には主の御体（パン）と御血（ぶどう酒）が聖別されます。まさに、聖卓は主の食卓であり、イエス様なのです。ですから私たちは一礼をするのです。

ご遺骨を安置する場所が聖卓や祭壇の中に整えられていることは大きな恵みだと思います。主イエス様の大きな愛の中で守られているまさに「スイートルーム」です。この度逝去された信徒の本籍は盛岡聖公会の住所と同じです。まさに、まことの故郷である「ホーム」に戻って来られたのですね。聖歌 510 番 1 節「生まれいづるときは心のうちに言葉をさずかり神の愛につつまれ
まことのふるさとへ帰る旅がはじまる」
2 節「生きているときには　苦しむうちに喜びがめばえ神の愛につつまれ
まことのふるさとへ帰る旅がはじまる」
3 節「死のふちにたつとき　おそれのうちにすべてはゆるされ神の愛につつまれ
まことのふるさとへ帰る旅がはじまる」
が私の心に響いています。
私たちは神の愛に包まれてこの世に何も持たずに生まれ、生きているときには喜びも悲しみも苦しみも経て、神の御心ではなく自己本位な生き方によって神さまに対してたくさんの罪をおかしながらも死の時にはすべての罪はゆるされ、大きな神の愛に包まれて何も持たずにこの世から旅立っていくのです。
罪が赦されるからこそ私たちは神の国へ入ることが出来るのです。「何も持たない」とは罪も持たないということなのではないでしょうか。神さまからの大きな福音ですね。私たちのこの世の生涯は、まことの故郷へ帰る旅なのです。（司祭　越山哲也）